

## 留学生の日本語指導の現状と課題

外国語学部国際関係学科 東 弘子

本報告では、昨年度に引き続き、外国語科目としての「日本語」科目の開講状況と課題を記す。また、日本語担当教員のミーティングについても紹介する。

### 1. 「日本語」の開講状況と問題点

2010年度の「日本語」クラスは、例年通り前期9コマ(学部留学生対象:4コマ, 短期留学生対象:5コマ)を開講した。しかし、後期から特別聴講学生の人数の増加とともに、科目の履修が義務的ではないものの日本語指導が必要である研究生の受入も増えたため、急遽、後期に科目増設を要求し、11コマ(学部留学生対象:5コマ, 短期留学生対象:6コマ)の開講とした。カリキュラム上は学部留学生を対象とした科目「日本語 I」「日本語 II」「日本語 III」があるので、レベル区別をクラス毎に表すために a: 上級(学部生), b: 初級(短期留学生), c: 中級(短期留学生)といった符号を付けて運用している。

その他、留学生対象の科目である旧カリキュラムの「日本事情(文化・社会)」は短期留学生対象の内容として運用し、新カリキュラムの「日本の文化」「日本の社会」は学部留学生と短期留学生の混合クラス、新カリキュラムの全学共通科目「多文化社会におけるコミュニケーション」「コミュニティにおけるコミュニケーション」では日本人学生と上級の留学生の混合クラスとなっている。本報告では主に「日本語」の状況を説明する。

本年度後期の開講状況は次ページの<表>の通りである。

学部留学生は、新カリキュラム体制になってから入学生が増加傾向にある。「日本語」は、それぞれの所属学部の必修単位である全学科目の外国語としての履修となる。(履修規程では「外国人留学生等」となっており、留学生の他、ある一定期間外国で教育を受けた帰国子女もこの中に含み運用している。)留学生全員が日本語を履修しているわけではなく、1年生6名が日本語 Ia を、2年生6名が IIa を、3年生1名が IIIa(1コマのみ)を履修している。学生の日本語力は上級または超級であり、授業は、アカデミックプレゼンテーションやアカデミックライティングを意識したアクティビティ重視のシラバスとしている。後期は短期留学生も増え十数名のクラスサイズとはなったが、学生の発表や学生相互の批評の機会を意識的に多く設定したり、毎週の宿題を課すなど、きめ細かい指導をおこなっている。こうした科目に、研究生や特別聴講生のうち上級者にのみ履修を許可しているが、それによって出身国や学習背景が多様となり、様々な刺激を与えあうことができているようである。

一方、特別聴講学生など短期留学生は毎年 10 名程度であったが、近年全学的に提携大学が増加してきたことに伴い、本年度後期は特別聴講生 12 名(韓国4名、ドイツ4名、フランス2名、スペイン2名)、研究生 6 名(中国4名、フランス1名、米国1名)であった。日本語のレベルをチェックするため、受入担当教員から学習歴などの情報を収集し、また学務課国際交流課の職員の協力を得て来日直後に簡単なプレイスメントテストを行い、その評価を一覧表にした上でクラス分けをした。後期は初級を3クラス、中上級を3クラス設け、初～中上級者までを

対象とした日本事情を1クラス設け、各学生が最低限週に4コマ以上の日本語授業が受講できるようにした。それでも、学生のレベルや学習歴は様々であるため、クラスのいくつかは日本語のレベルに差が生じてしまっていることも事実である。上級者には学部向けの授業の履修をすすめている。

<表>2010年後期 日本語・日本事情の内容と履修状況

学生欄の 学:学部生, 特:特別聴講生, 研:研究生

		月	火	水	木	金
1	科目名	日本語 I a			日本語 II a	
	レベル	学部1年生・上級			学部2年生・上級	
	内容	アカデミックプレゼンテーション1			アカデミックライティング2	
	学生	学:6名, 特3名, 研2名			学:5名, 特1名, 研1名	
	担当者	中道一世			石川美紀子	
2	科目名	日本語 II a	日本語 II c		日本語 I a	
	レベル	学部2年生・上級	中・上級		学部1年生・上級	
	内容	アカデミックプレゼンテーション2	読解/聞取		アカデミックライティング1	
	学生	学:6名, 特2名, 研1名	特:7名		学:6名, 特:4名, 研:2名	
	担当者	中道一世	馬場典子		石川美紀子	
3	科目名				日本語 III a	
	レベル				学部3年生:上級	
	内容				発表ピア学習と読解/表現	
	学生				学:1名, 研:1名	
	担当者				黒野敦子	
4	科目名	日本語 I b	日本語 III c		日本語 II b	日本事情(社会)
	レベル	初級	中・上級		初級	中・上級
	内容	語彙	テーマによる発表とプロジェクトワーク		会話	日本事情社会
	学生	特:3名, 研:3名	特:6名		特:6名, 研:2名	特:11名
	担当者	山口和代	横内美保子		米勢治子	中道一世
5	科目名		日本語 III b			日本語 I c
	レベル		初級			中・上級
	内容		文法			作文
	学生		特:5名, 研:2名			特:9名
	担当者		加藤淳			伊藤由香

大きな課題としてあげられるのは、大学全体が国際交流を推進する方向性にありながら、短期留学生に関する授業マネジメントを行う組織がないことである。日本語に関する授業担当者は非常勤講師9名であり、留学生の履修に関する事項について本務とする専任教員がいないため、日本語教育に関わる領域の専任教員がシラバスとクラスの管理をし、日本語のすべて

の授業(学部向け・短期留学生向け両方)について、担当者と専任教員とで、継続的に授業報告をメールで行い、日々、留学生の状況を確認しているといった現状である。特別聴講生が増加する中、この体制ではもう限界である。履修指導をするにも責任体制がはっきりしていないため、指導に従わない場合など、当方としてもやりきれない思いが生じてどうしようもない。また、留学生のニーズも様々で、本学での日本語の単位を帰国後に読み替えたい場合とそうでない場合があり、その際に受講上のルールをどのように設けるかなども、協定大学や受入教員、学生本人および、授業担当教員から情報を収集してきちんと対応すべきではあるはずだが、現状では困難である。そもそも、どのようなレベルの特別聴講生を何名まで受け入れられるのかといったことも、各部会での議論があるのみで、大学全体としての方針や計画があるわけではない。

そうした状況から、現在、全学組織としての「国際交流室」の設置について教育研究審議会において計画されているようである。本学学生の留学指導や大学間協定などの推進も重要であるが、それに伴い本学が責任を持って留学生を受け入れるのであれば、留学生の生活・学習の指導が継続的な業務として可能となる体制作りを、積極的に進めてほしいと願うばかりである。

## 2. 担当者ミーティング

授業後に毎回報告されるEメールでの授業報告による相互の情報交換の他に、本年度も、昨年度に引き続き高等言語教育研究所の予算で日本語担当者によるミーティングを行った。

日時:2010年12月23日(木) 12:10~13:40

場所:E302(国際関係学科共同研究室)

参加教員:6名(出席できなかった講師は4名。欠席者にも資料は配付した。)

非常勤講師:馬場典子、加藤淳、石川美紀子、黒野敦子、米勢治子

国際関係学科:東弘子

ミーティング内容:

- ・相互に情報共有できるように、事前に講師全員から、授業の目標(1行程度)、授業の流れ(5行程度)を提出していただき、それを元に資料を用意した。また、それぞれの授業で使用している実際の教材の1回分のコピーも添えた。
- ・資料を参照しつつ、学部生対象のクラス、短期留学生対象のクラスといった順に、授業の様子を確認しつつ、内容やクラス編成なども含め、授業運営上、気づいたこと、疑問に思うこと、改善の余地があることなどについて意見交換をした。

学生が個別に学習上抱える問題などについての意見交換や、クラス編成、到達目標の設定など、具体的な議論ができて大変有意義であった。通常のメールによる情報交換だけではわかりにくい、詳細な授業の様子や授業の意図などを相互に十分に理解し合うことができた。

また、専任教員からは、次年度の留学生数の予測なども含め、来年度の時間割や運営について説明した。講師のほうからも、短期留学生や研究生のケアについて、大学の体制の問題について指摘があった。

ミーティングで使用した資料のファイルは、高等言語教育研究所に保管してある。

以上